| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 松田　真里（まつだ　まり） |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 報 告 番 号 | 乙第３６３号 |
| 学位授与年月日 | 2023 年 3 月 31 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号)<br>第４条第２項該当 |
| 学 位 論 文 題 目 | マルセル・プルーストの作品における動物表象についての総合的研究 |
| 審 査 委 員 | （主査）坂本　浩也（立教大学大学院文学研究科教授）<br>石橋　正孝（立教大学大学院観光学研究科准教授）<br>荒原　邦博（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）<br>小黒　昌文（駒澤大学総合教育研究部教授） |

# Ⅰ．論文の内容の要旨

## （１）論文の構成

序論
第１部　『失われた時を求めて』以前の作品群および書簡における動物表象
　第１章　初期作品から中後期作品における動物表象
　第２章　初期美術批評における動物表象
　第３章　書簡における動物表象
第２部　プルーストの作品における動物表象とその時代背景
　第４章　博物学（パリの動物園・水族館・博覧会）
　第５章　プルーストの作品群と動物愛護および教育
第３部　『失われた時を求めて』における動物表象
　第６章　動物のテーマ批評
　第７章　プルーストの小説美学と動物表象
結論
参考文献

## （２）論文の内容要旨

本論文は、20 世紀フランスの小説家マルセル・プルースト（Marcel Proust, 1871-1922）の作品における動物のイメージについて考察した研究である。一般に、プルーストの『失われた時を求めて』といえば、有名な紅茶とマドレーヌの挿話が示すとおり、「無意志的記憶」と呼ばれる経験にもとづき、文学と芸術の理論を提示する難解な哲学小説とされている。しかし実際には、芸術にくわえて恋愛・社交界というテーマを大きな軸としつつ、19 世紀末から第一次世界大戦にいたるフランス社会のさまざまな変容を描き出す風俗小説でもある。また、その文体の特徴のひとつとして、ただ美的・装飾的なだけではないアイロニーやユーモアを秘めた比喩の多用があげられる。本論文は、そうした無数の比喩のなかから、動物のイメージを喚起する比喩の意外な多さに着目し、『失われた時を求めて』以前の作品や書簡も視野に入れつつ、プルーストの小説美学における動物の位置づけをよりよく理解する試みである。

第１部では、『失われた時を求めて』以前の作品群における動物の位置づけが検討される。

初期の短篇小説や散文詩を集めた『楽しみと日々』と、未完のまま放棄された三人称小説『ジャン・サントゥイユ』、さらには未発表の美術批評（シャルダン論）や私信において、プルーストがどのような種類の動物をどのように描いているかという問題が、数多くの事例をもとに具体的に論じられる。

第２部では、プルーストが生きた世紀転換期のフランス社会における動物の位置づけを視野にいれたうえで、そうした時代背景と作中の描写とのつながりが個別に検証される。おもに、パリにおける動物園や水族館の整備、愛玩動物の流行や動物愛護運動の高まり、学校教育における寓話（動物を主人公とするもの）の重視という３つの観点から、プルーストの小説の細部との接点を探る試みが展開される。

第３部では、まず『失われた時を求めて』における言及回数が相対的に多い動物に対象がしぼられ、鳥、牛、馬が個別にとりあげられる。さらに、より微細な生物への言及が検討され、必要に応じて草稿資料を考慮しつつ、それぞれの動物のイメージがもつ意味の広がりが示される。最後に、病や死の主題などをとりあげつつ、動物をめぐる神話的なイメージの書き換えという観点の重要性が指摘される。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### （１）論文の特徴

本論文のあつかう主題は、マージナルに見えて、じつはアクチュアルなものである。じっさい、近年のフランス文学研究では、現代社会および現代思想における「動物倫理」にかかわる諸問題への注目に呼応するかのようにして、動物（あるいは動物性）というテーマへの関心が急激な高まりを見せた。プルースト研究も例外ではなく、過去 15 年ほどのあいだに、とりわけ博物学的な比喩の豊富な使用例に着目した本格的な論考が、あいついで発表されている。本論文は、そうした最新の動向をふまえながら、『失われた時を求めて』以外の初期短篇や書簡にまで調査対象を広げ、プルーストの作品全体における動物表象についての総合的な理解を提示しようとする意欲的な試みである。

本論文は総合的研究を標榜するが、全体の構成からうかがえるとおり、先行研究を超える統一的な視点を提示したり、プルーストが動物に言及している膨大な事例を草稿にいたるまで網羅的に検証するといった、そもそも実現不可能な野心にとらわれているわけではない（一説によると代表作にかぎっても 150 種を超える生物への言及があるという）。むしろ、ときに恣意的と見られることをおそれず、折衷的なアプローチによって先行研究の補完を試みる点が、本論文の特徴である。

プルースト研究の最新動向のひとつとして、草稿研究と文化史というふたつの方法論の融合があげられる。本論文は、限られた草稿のなかにしか存在しない動物のイメージをクローズアップしたかと思うと、同時代の新聞記事の調査などを通して、これまであまり注目されてこなかった動物愛護の問題などをとりあげ、文化史的な背景への接続を試みている点で、最新動向の吸収を試みている。このように『失われた時を求めて』の最終稿にとどまることなく、可能なかぎり分析対象を拡張している点に、本論文の資料的な価値を認めることができる。

### （２）論文の評価

松田氏の論文は、最新の研究動向を可能なかぎり視野に収めながら、コーパスをプルーストの初期作品に拡大するだけでなく、同時代資料の発掘や草稿の検討を試み、補完的な読解を提示しようとした点において評価に値する。芸術論・思想・文体といった伝統的なテーマにとどまらず、アクチュアルな主題にとりくんだ着眼もよい。ただし、新しい主題の研究には発見上の利点もあるが、準備の過程で他の研究者にすぐれた論考が公表されて

しまうリスクも潜んでいる。動物をめぐる問題系の総合的な考察を企図した本論文においても、同時並行的にフランスおよび日本で発表された重要な論考の要約的な整理にとどまっている部分が散見されることは否定しがたい。とはいえ、たとえば、先行研究の少ない初期作品における動物への言及が『失われた時を求めて』とは異なる傾向（比喩ではなく生命そのものへの関心など）を秘めていることを具体的に明らかにした第一部は、意義のある成果と認められる。動物と結びついた問題系（知性、感情、無意識など）を通してプルーストの芸術理論・小説美学の形成をたどる試みには、さらに精緻な検証が期待される。また、第二部で扱われた動物愛護や学校教育は、これまでプルースト研究者による本格的な検討の対象となっていないか、伝記的事実との関連においてのみ調査されてきた分野であり、松田氏の独創的な着眼といえる。

このように、拡大されたコーパスにもとづいてプルーストの作品の細部に新たな読解の可能性を開こうとする一方、資料の羅列的な提示にとどまり、解釈が一面的になりがちなこと、方法論的な定義が不明確で厳密なテーゼが見えにくいこと、引用・脚注・図版の指示や参考文献一覧に単純な編集上の不備が多く見られることなど、複数の課題が審査委員から指摘された。とはいえ、長期にわたって膨大な文献資料を収集し、初期作品から『失われた時を求めて』にいたる動物の問題系の位置づけを具体的に示したことは、ひとつの成果であり、博士論文に求められる一定の水準に達していると見なせる。